

迎 春



直島から柏島の朝日を眺める
(本文中に関連記事があります)

目次 / contents

新年の挨拶 2

特集「水辺とまちづくり」 6

- ・水辺のアート発信地「クリエイティブセンター大阪」 / 森脇宏
- ・水都大阪 2009 とうんぱく 2009 ~ 尼崎運河博覧会 / 絹原一寛
- ・大阪・天神橋を見下ろす「川辺の暮らし」 / 柳井正義

きんきょう 10

- ・近況一地域を沸かす NPO / 三輪泰司
- ・アルパック建築チーム研修報告「伝統とアートの融合」
- ・ワイガヤミーティングやってます / 中塚一

メディア・ウォッチ 15

- ・「クリエイティブ都市論」 / 杉原五郎

まちかど 16

- ・戸田漕艇場の風景 / 坂井信行



地域を動かすチカラ

代表取締役社長 杉原 五郎

2009年4月、アルパックの所員8名による共著「地域のチカラ〜夢を語り合い、実践する人びと〜」（自治体研究社）を出版しました。自治体職員、議員、住民、社会人大学院生などいろいろな方にお勧めしましたところ「感動した!」という嬉しい言葉をいただきました。

また、けいはんな学研都市では、私のしごと館問題をテーマに2回の市民フォーラムを開催し、「しごと館の有効活用に向けた、地域からの提案」をまとめました。中小企業家同友会の方々と中小企業憲章の制定、地域経済の活性化と中小企業振興の条例づくりに取り組みました。これらを通じて、昨年は「地域を動かすチカラ」について深く考えた一年でした。

2010年は、地域を動かし、明るい日本を創る一年にしたいと心に誓っています。

地域ストックを生かし、輝く元気を創ろう

取締役会長 金井 萬造

入社以来、ライフワークの一つとして進めてきた業務である港湾や都市の沿岸域に着目して、30〜40年の過去から、未来の展望を創っていくことを考えています。新たな大きな投資が難しい中で、人材を含めた今ある地域の色々なストックを活かす方法を使った新しい地域づくりが必要になっています。

今年は、未来の地域からみて、地域が輝いている状況にすること、そのような地域に行ってみたい、地域生活・活動に参加したい、住んでみたい、再度訪問したいと思わせる「地域ブランド」づくりを産業・生活・活動・環境面から元気創造システム、即ち「感動をもたらす仕組みづくり」を進めていきたいと思っています。



地域のためにご奉仕を

取締役相談役 三輪 泰司

元旦の早朝、桃山御陵へ登ることが永年の慣わしです。桃山南学区は、宇治川と桃山丘陵に囲まれ、とても風光に恵まれています。

1963年に東京から移り、住んだのは公団桃山団地。ノーベル賞を受賞された益川敏英さんは、1970年からここにお住まいで、小林稔さんと「CP対称性の破れ」について論文を書かれていた頃です。私も「21世紀の設計」で忙しい時でした。テラスハウスと中層が半分ずつで188戸の小さな団地で、益川さんは4号棟、我が家は10号棟。桜並木がすごかったのですが、その桜も老木になり、住民も激減しています。いよいよ再生期です。国交省淀川河川事務所さんから、横を流れる山科川の整備事業のまとめ役の予約?を受けています。また地域のために、ご奉仕する年になるようです。

地域での実践をともし

取締役副社長 馬場 正哲

今年も、天王寺区未来わがまち会議の「区民除夜の鐘撞きたい」から四天王寺本坊での「新年祝賀のつどい」ではじまりました。昨年は、耳順のとしおとこの年、いつでも何でも素直に聞くことができるようになったのか、自宅の自治会長を仰せつかり、実家ではまちづくり協議会会長を引き受ける羽目となり、立場が逆転して、地域自治の主体の立場に立たされ、一方ではまちづくりアドバイザーを派遣いただいていたのルール協議から地区計画を目指す、苦闘の一年でした。

今年はこの「実践」を実りにかえる年。地域では、誰が何が動くべきか、住民・地権者の立脚相異、敗戦・民主化・高度成長・核家族の効率主義をへて、地域の主体が多面的な「純化」の下に揺らいでいます。このいきどまりな時代を見据えるのは、天地自然の働きに耳傾けその働きを人間の智力で制御しながら人類の幸福を発展させる「造化」の視点を取り戻す必要があるのではないか、新たな現役が始まります。

本年もどうぞよろしく
お願いいたします



2020年

京都事務所長 松本 明

「地域主権」のキャッチフレーズが定着した2009年でした。地域計画の現場では、独自性、責任及び成果がますます求められる時代となっており、スタッフ全員が果敢にチャレンジしました。自治体マスタープラン、産業振興マネジメント、中心市街地活性化、住宅政策、コミュニティづくり支援、景観・ランドスケープ計画、福祉施設計画などに幅広く取り組み、専門性の深化と新たな横断性を模索してきました。

「成熟社会」というキーワードが翻訳洋書で紹介されてから40年近く経つとのことですが、グローバル化のなかで、成熟する暇もあらばこそ、社会のめまぐるしい変化を的確にとらえ、時代に即した豊かさの提案をし続けることが、私どもの使命と考えております。JUMPの年、本年もどうぞよろしくお願いいたします。

我が国初の「日本版TKTS」を大阪に

大阪事務所長 森脇 宏

現在、関西のライブエンターテインメントの振興をめざして、当日券のみを割引販売するチケットセンターを開設するため、NPOを立ち上げて取り組んでいます。こうした仕組みは、ニューヨークのタイムズスクエアで『tkts』という先例があり、ブロードウェイの当日席を集約し、一覧性の下で割引販売を行っており、多くの観光客が連日並ぶ光景は、観光名物にもなっています。

演劇・演奏・古典芸能等のライブエンターテインメントは、大阪の文化にとって食文化と並ぶ大きな2本柱だと思っていますので、大阪と関西の活性化に貢献できればと考えています。年度末頃に大阪での開設を目指していますので、ぜひご利用ください。

改革から創造の年へ

名古屋事務所長 尾関 利勝

2009年4月、名古屋では“庶民革命”を掲げた河村市長が誕生し、8月には“コンクリートから人への政権交代”を掲げた民主党政権が誕生しましたが、地方や暮らしのデフレスパイラルは、益々強

なっています。この変化を安定した生活創造につながるのが地域と自治の課題です。

昨年は地域主体のまちづくり“エリアマネジメント”と“歴史を活かしたまちづくり”に力を注ぎました。名古屋開府400年の今年には“政治の変化を豊かな暮らしの創造”に向ける“温故知新の魅力づくり”、“町衆まちづくり”、“自ら歩く活動”に力を注ぎます。よろしく御願いたします。

フライング・コンサルタント

東京事務所長 堀口 浩司

東京事務所では新宿、多摩、神奈川の3つのグループがそれぞれの得意分野を意識しながら、時には連携・協同して業務を行っています。都市計画法の改正に関する案件や景観・住宅など、まだ少数の業務ですが、東京と大阪のスタッフの共同案件も動き出しています。私も長らく関西で仕事をしていますから、国と都と市町村、それぞれの関係や体質、コンサルタントとの距離感など、関東と関西の違い、更に自治体による違いなど新たな発見もあり、相互の知識交流、技術交流も有益に感じています。東京のコンサルタントと同様、私も毎週のように東阪間を往来していますが、OD間が同じだけ楽かもしれません。

もっと外に出て見聞を深め、無駄をしよう

九州事務所長・(株)よかネット代表取締役 山田 龍雄

当社では業務の9割方は、これまでのお付き合いのあった自治体や人からの紹介です。これまでのアルバックからの蓄積をはじめ、九州に根をおいての活動も含めて、本当にありがたいことと思っております。しかしながら、昨年を振り返ると、私を含め、所員たちが仕事にかまけ、外に出て何か無駄をすることを怠っていたように感じます。今年度のチャレンジは、まさにタイトルの通りです。これが会社としてのネットワーク強化につながってくるだろうと思っています。具体的な業務の方では、中心市街地活性化に絡んで大牟田市や北九州市において再開発系の業務に携わっており、実現に向けて事業化へのサポートをしていきたいと思っています。



新年のあいさつ

新年あけまして
おめでとございます

今年も心身の健康のために鉄分を十分に取りたいと思います

京都事務所 山崎 裕行

入社して早くも5年目を迎えようとしています。いつまでも「若手」と言っているわけにはいきません。もっとも、入社して以来、私の体型は、縦横に広がり、一部では「パパ」というあだ名を頂くようになりました。また、以前にもまして、飲みっぷりもオヤジ化してきています。健康には十分に気をつけたいと思います。

さて、去年は、あまり鉄道での旅ができませんでした。今年、できれば旅の回数を増やしたいと思っています。ローカル線にでも乗って、車窓の景色の移り変わりを楽しむことはもちろんのこと、その土地の“良いところ”、“良いもの”を見ながら、感じながら、のんびりと旅をしたいですね。今年、是非、関西エリアのローカル線を制覇したいと思っています。

いまだからこそ、自転車に乗って

京都事務所 江藤 慎介

大学時代に自転車に乗り始め、1年に1度は「旅」するようになりました。去年は京都から岐阜を経由して富山に到達、日本海に沿って帰る9日間900kmの旅。醍醐味はまちからまちへと続く道のりを「感じる」こと。普段は表層しか見えないまちも、到達するまでの地形や自然、距離や時間と向き合うことでとても愛おしくなります。川沿いを北上し、峠の先にあった飛騨のまちは最たるもので、まちを育む姿勢を教えられました。旅の疲れを癒す温泉やご当地グルメもまた格別です。

入社3年目に突入する今年、若手としての区切りの年ですが、知識とともに体感して獲得した経験を積み重ねながら、持ち前のバイタリティで猪突猛進します。

色々な自分を楽しむ一年に！！

京都事務所 前江田 晴香

今年で入社してからまる三年を迎えます。溯ればアルパックにやって来てあつと言う間に7年の月日を過ぎてきました。昨年には三十路を向かえ、月日が流れるのは早いものだと実感せずにはられません。これからの自分はどのように歳を重ねていくのか、真剣に考えさせられています。基本、仕事においても、それ以外においても充実した毎日を送りながら歳を重ねていく、という事が最大の目標です。が、どうしても視野が狭くなる事が多く、充実した日々なんぞ程遠い理想なのです。ですからひとまずこの一年は、働く自分、家庭での自分、色々なことにチャレンジ出来そうな気がする自分等などを楽しみ、その時の気持ちを大切に過ごしていきたいと思っています。

明るく楽しくをモットーに

大阪事務所 西村 創

今年でついに入社5年目を迎えることになりました。私事ではありますが、年齢もちょうど30歳（ジャスサー）を迎えることになりすし、若手からのさらなる飛躍のために、土台固めを行いたいと考えています。自分の歩んできた道と自分の位置確認を行い、これから歩むべき次の段階へと進むそんな一年を過ごせればと思っております。地域の人達と本当に続けることのできるまちづくりの実現のために、人との関わりを大事にし、私自身が地域に必要とされる人材となれるように、これからも身を粉にして（大晦日には天王寺区の区民のみなさんと除夜の鐘を夜空に響かせておりますし）、明るく楽しくをモットーにまちづくりができればと思っております。本年もよろしくお祈りいたします。

<編集委員会から>

恒例の新年の挨拶は、役員と若手所員が「チャレンジ」をキーワードに執筆しました。

本
年
も
ど
う
ぞ
よ
ろ
し
く
お
願
い
た
し
ま
す



3年目

大阪事務所 渡邊 美穂

アルパックに入社し、3年を迎えようとしています。「もう3年」「やっと3年」「まだ3年」それぞれの言葉に3年間の色々な経験が思い出されます。社会人になり、この3年、強く意識していたのは「バランス」ということです。仕事の上だけでなく、仕事と私生活、メンタルなことなど多くのことにおいて、この大切さと難しさを感じ、どうにかバランスをとれないかと四苦八苦してきました。バランスをとれるようになったわけではありませんが、今年は少し「ハーモニー（調和）」を意識してみようかと思っています。私は、趣味でピアノを弾きますが、そこでは、右手と左手のバランスに気をつけてハーモニーを大切に指導を受けます。バランスは最終的な表現ではありません。バランスを意識しすぎて、むしろバランスを崩していることもあるのかもしれませんが、バランスをとらなければよいハーモニーは生まれませんが、少しでも心地よいハーモニーを奏でられる1年にしたいです。

行動力を強化し日々攻めています

大阪事務所 武藤 健司

早いもので今年に入社3年目に突入します。そろそろ社会人らしい行動力や、ある程度の事には動じない落ち着きさが少しは出てくるのではないかと思います。もうしばらくお待ちいただけると幸いです。

日々業務に取り組む中で、「他都市ではどうしているのか」、「もっと違った角度、目線から検証できないか」などと感じることが、余裕がなかった入社当初と比べ多くなっているように思います。これらは経験でカバーできる部分もあるかもしれませんが、勉強不足であることは否めません。

今年は、自らの幅を広げるためにも、より多くのまちに出向き、人と出会い、感性を働かせたいと思います。そのために、まずは行動力を強化したいと思います。

須磨の海でみる初日の出

大阪事務所 岡崎 まり

犬を飼い始めた10年ほど前から元旦には愛犬とともに須磨の海まで初日の出を見に行くことが恒例になっています。寒さも手伝って身も心も引き締まった気持ちになり、見慣れている海の風景がこの時ばかりはまったく違って見えるから不思議です。見る人がそれをどういう気持ちで見ると、どのように捉えるかで目の前に広がる風景や物事の意味が大きく変わっていくことを実感します。

これは仕事においても同じことがいえるのだろかなと思います。今はある方向からしか捉えられていないことを、今年は違った角度からも捉えることができるようになりたいと思います。そして初日の出を見る時のように見慣れた風景を一変させるような様々な発見を日常の中でしていきたいと思います。

健康的なまちなかサイクリングに挑戦！

大阪事務所 橋本 晋輔

入社して約1年。入社前に比べると周辺環境や生活スタイルが大きく変わり、日々刺激的で楽しい毎日を送っています。ただ、それ以外にこの1年で変わったことがもう1つあります。それは、体型が変わってしまったこと。明らかに脂肪がついてきています。昔、大学の先生が25歳が体型の曲がり角だと言っていたのですが、それがまさに現実に起きつつあります。

このままでは、まずいと思い最近自転車を買いました。入社を機に大阪市内に住むようになりましたが、まだまだ行ったところのないまちがたくさんあります。今年はダイエットも兼ねて、自転車で大阪や周辺のまちの良い場所、面白い場所探しに励みたいと思います。



特集「水辺とまちづくり」



街で生活していく上で、普段、都市が近代化していく中でコンク
きた水路や生産機能としての工場など
に暮らす私たちにとっては、なくてはならな

かつては、水運により活気づいていた運河沿いは、近年、アートや芸術の舞台として、様々なイベントが開催され、新しい彩り豊かな交流空間として再生しはじめています。今号は、「水辺とまちづくり」というテーマで大阪や尼崎を中心に各地区での新しい再生の芽生えをご紹介します。

何気なく眺めている川の風景。
リートにより人工的に造られて
の建物が並ぶ水辺の風景ですが、街
い癒しの空間です。

水 辺のアート発信地「クリエイティブセンター大阪」／大阪事務所 森脇 宏

産業遺産を活用した複合イベントスペース

河川筋に発達した大阪港の内港部分、木津川沿いの名村造船所跡地が、いまアートの一大発信地として賑わいつつあります。クリエイティブセンター大阪（略称 CCO：Creative Center OSAKA）という名称で、毎週、週末には何かイベントをやっている状況です。

主な施設（イベントスペース）としては、BLACK CHAMBER（イベントホール、工房、ギャラリー等、様々なジャンルの創作活動に対応できるスペースを備えた複合施設）、STUDIO PARTITA（音楽イベント・ライブに最適なホールで、スタンディングキャパシティ約700名、リハーサルスタジオとしても利用可能）、屋外エリア（RED FRAME、BLUE FRAME、FLOATING STAGE等、野外イベントの他、映画や映像、スチール撮影も可能）などがあり、その他にも幾つかのイベントスペースがあります。

この特徴は、多様な施設があることから、演劇、演奏、ダンス、展示、ディスコなど、様々なイベン



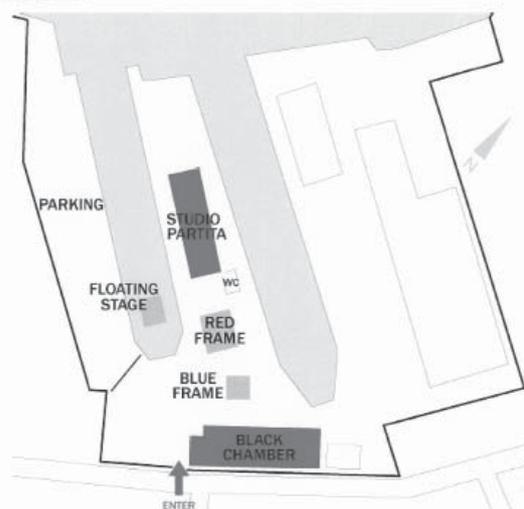
トが同時に開催できるため、文字どおり複合イベントスペースとして利用できることです。しかも、水辺の産業遺産という特異で非日常的な空間であり、周辺が工場地域ということもあって、音響なども気兼ねしないでいいことから、開設以来、人気上昇し続けています。こうした特徴によって、海外からの問い合わせや視察も多いと聞いています。

ちなみに、2007年には名村造船所跡地として、経済産業省の「近代化産業遺産」に認定されています。

アート発信の経緯

こうしたアート発信地としての展開が可能になったのは、小原啓渡氏（大阪市立芸術創造館館長）の役割が大きかったようです。小原氏は、京都市三条通のアートコンプレックス1928（元大阪毎日新聞社京都支局ビルを活用したアートの貸スペース）を立ち上げるなど、アートを切り口にしたまちづくりに関わるプロデューサーで、日本版TKTS（本号の私の新年ご挨拶をご参照ください）の開業を目

敷地内MAP



ドッグ跡（右手水面）の左のSTUDIO PARTITA（奥の建物）とRED FRAME（手前の鉄骨）
出所：CCOのホームページ（敷地内MAPも）< <http://www.namura.cc/> >

指す取り組みでは、私もご一緒させていただいています。以下では、小原氏にお聞きした経緯等をご紹介しますこととします。

小原氏の名村造船所跡地への関わりは、土地を所有されている千島土地(株)の芝川社長と2003年に出会ったことに始まります。芝川社長との会話で造船所跡地があることを知った小原氏が、実際に現地を見せてもらい、「これは面白い」という直感から、最初は「何日かイベントに貸してほしい」と依頼し、小原氏が親しくしている元気な制作者やアーティストに声を掛けて、2004年にイベント“ナムラアートミーティング”を開催したところ、全国から何百人も来訪者があって成功したことで弾みがつきました。

そこで、「単発イベントではもったいないので、貸してください」と千島土地(株)に申し込み、設備投資もお願いして、2005年に常設のイベントスペースとしてオープンし、徐々に利用も増え、賃貸スペースも広がってきました。

なお、この“ナムラアートミーティング”は、その後も毎年開催され、2034年まで続ける予定です。

利用状況と効果

イベント利用は、金土日の週末が多く、毎週だいたい何かが開催されています。イベントのジャンルや規模は様々ですが、前述のように複合イベントが得意で、2~3千人規模の大きなイベントでは重宝されているようです。



アプローチルート沿いの公園と屋内プール
(公園の向こう側、屋内プールの向かいにスーパー銭湯がある)

なお、特別の宣伝はしていませんが、個々のイベントのチラシが、ここの宣伝にもなっていることから、利用が徐々に増えてきているようです。

また、クリエイティブセンター大阪では、名村造船所跡地だけではなく、最寄駅(地下鉄北加賀屋駅)との間に、イベントスタッフや来阪アーティストの滞在用に、アーティスト専用宿泊施設のAIR大阪を2008年にオープンしています。さらに、こうした滞在型だけでなく、この周辺に住みついて、日常的に創作活動始めるアーティストも登場し始めているようで、こうしたアーティストに適切な物件を紹介することもしているようです。

今後の方向

こうした効果もあって、クリエイティブセンター大阪が位置する住之江区も、応援するスタンスを持っていて、北加賀屋クリエイティブビレッジ構想を策定し、アート等の創造産業を育成し発信していくと計画されているようです。

クリエイティブセンター大阪には、こうした発展と期待がありますが、課題の一つとしては「遠い」というイメージがあるようです。実際に行ってみると、最寄駅(地下鉄北加賀屋駅)から徒歩10分弱で、遠いとは感じませんが、工場地域を通るため、初めての来訪者には不慣れでもあることから、アクセスルートの沿道環境やサイン設置等が望まれるところです。アクセスルート沿いに、グランドのある比較的大きな公園、屋内プール(大阪市立住之江総合会館)、神社、スーパー銭湯等があり、上手くつなげると、いい散策ルートができそうです。

また、週末には賑わうものの、平日はリハーサルや撮影等の利用に限られ、飲食等の来訪者サービスが成立しないことも課題の一つです。アートの発信地から始まって、日常的な賑わいを形成していく試みは、まだ先が長そうですが、小原氏のチャレンジに期待しつつ、私も微力ながら応援できればとも思っています。



ひと・まち・地域



水都大阪 2009：中之島公園でのワークショップの様子



水都大阪 2009：道頓堀川の遊覧船

水 都大阪 2009 とうんぱく 2009 ～尼崎運河博覧会～／大阪事務所 絹原 一寛

水都大阪 2009 をふりかえる

「水辺とまちづくり」の一大イベントとして、大阪では「水都大阪 2009」が、昨年 8 月 22 日から 10 月 12 日までの 52 日間にわたって開催され、期間中に 190 万人（主催者発表）が訪れました。皆さんは足を運ばれたでしょうか。私なりの切り口で、このイベントをふりかえてみたいと思います。

水辺のまちづくりの本格展開への一里塚

まず、このイベントの意義についてですが、本格的な水辺のまちづくりを切り開く一里塚として、大いに評価できると考えます。水辺に着目した観光・まちづくりにずっと関わってこられた市民・事業者・プランナー・行政の地道な努力がベースにあり、その上で市・府による河川整備（道頓堀川水辺整備事業や川の駅はちけんやの整備など）も進み、今回のこの「水都大阪 2009」へとつながったと捉えるべきだと思います。

また、実際に会場へと足を運ぶと、安藤忠雄さんやヤノベケンジさんなど著名人が手がけられた話題性に富む作品がある一方、市民参加型の手づくりのワークショップ・イベントが随所に散りばめられていました。今回の取り組みを機に、水辺というキーワードで新たなまちづくりのネットワークが生まれたのではないかと推察します。

本格的な水辺遊びへの課題

しかしながら、課題もあります。来場者の一人として感じましたが、「水都大阪 2009」と銘打ちながらも、「水辺」がまだまだ遠いものを感じました。陸上のイベントは多様な工夫がされているものの、肝心の「水辺を感じる／水辺で遊べるプログラム」が弱かったのではないのでしょうか。

一般的に「水都」といえば、イタリアのベネチアなどを想起してしまいます。「どこに行けば水辺で遊べるのだろう」と感じた方は少なくないでしょう。

「水都」という言葉が持つイメージに反して、現実

の大阪の河川空間はまだまだ十分応えられていないということでしょうか。

河川を魅力ある都市空間として積極的に使いこなすための試行錯誤は始まったばかりです。今回を機に様々な経験が重ねられ、新しい河川とのつきあひの提案が生まれてくることを期待したいと思います。

うんぱく 2009 ～尼崎運河博覧会～の取り組み

少し切り口を変えて、尼崎の取り組みを報告します。

最近では「工場萌え」など、高度経済成長期を支えたダイナミックな工場景観の評価が密かに高まっています。加えて、尼崎臨海地域ではパナソニックプラズマディスプレイの巨大な工場が立地し、以前の煙立ちこめる工場地帯とは全く違った、洗練された新しい工場地域を見ることができます。

かつてより尼崎の魅力を多角的に発信・プロデュースしてきた市民団体、尼崎南部再生研究室と、臨海地域の環境共生をめざす尼崎 21 世紀の森づくり協議会等が協働で、工都尼崎の動脈を担った繁栄の象徴である運河の魅力を知ってもらうイベントを開催しました。それが「うんぱく 2009 ～尼崎運河博覧会～」です。

イベントでは、尼崎南部再生研究室による名物ガイド付きの運河クルージングをメインに、高校生や大学サークルによるステージ、ゴムボートの試乗会、さらにはメイドインアマガサキ食材で作った限定 ama バーガーの販売、水質浄化実験施設の展示など、多様な催しが行われました。

1 日限りの手作りイベントでもあり、水都大阪 2009 と同列で比較できるわけではありませんが、今回が 3 回目ということで、徐々に規模が拡大し、内容も充実してきました。

水辺を取り戻す取り組み、はじまる

いずれの取り組みにも共通しているのは、水辺との新しい関係づくりです。埋立事業や治水事業等によって、水辺はいつのまにか我々の生活からは縁遠いものになってしまいました。水辺の新しい遊び方



うんぱく：運河クルージング



天神祭 自宅からの眺望

を提案し、そこからムーブメントへとつなげていこうと奮闘している姿がそこにはありますが、一部の人のお遊びと捉えられる傾向もあり、市民権を得ているとは言えない状況です。さらに、いざ実施しようとするれば、安全性の問題、管理上の問題など、超えなければならないハードルが非常に高く、それらをクリアする高度な戦略が必要となっています。

海外に目を向ければ、水辺が魅力的なまちも幾つも挙げられます。最近では高速道路を河川空間に再生したソウルの清溪川の例もあります。河川空間を「水都」の名に恥じないストックへと昇華していくため、我々プランナーも知恵が試されていると感じます。

大 阪・天神橋を見下ろす「川辺の暮らし」

大阪事務所 柳井 正義

4月某日／天神橋を見下ろす部屋に引っ越ししました。ちょうど川縁の桜並木が見ごろで、天神橋のうえから天満橋方面を望むと桜並木が川面に映り、大川が桜色に染まっているようです。この景色は水都大阪ならではの誇れるものではないでしょうか。川岸の桜並木は全国で見られますが、これだけの川幅で河川敷がなく桜の木が川面に張り出しているようなところは少ないと思います。加えて、ここはコンクリート護岸が目立たず圧迫感が少ないのもいい感じです。川縁の遊歩道を歩くと水面までが非常に近く感じられます。見方を変えれば増水時が心配なわけですが、淀川と大川の分岐点にある毛馬ポンプ場により水位が調整されているため、日本の川らしからぬゆったりとした流れが保たれているそうです。

6月某日／難波まで出かけた帰り、好天に誘われて道頓堀から大阪城公園までのミニクルーズ船に乗ってみました。明るく賑やかなとんぼりリバーウォークから東に向かうと、船はビルの谷間を進む感じになります。連なる建物の道路側はおそらくファサードに気を使っているのですが、川に面した側

は何の化粧もなく、まるで覗いてはいけない裏側を見てしまった恥かしさがあります。さらに東に進むと、直角に北に曲がり東横堀川に入ります。頭上は高速道路の高架で覆われ、真昼間というのに薄暗い。臭気も鼻につくようになり、まるで密林のなかを航行しているような錯覚に陥ります。すると突然、目の前に閘門（水門）が現れました。この水門により道頓堀川の水位が保たれているそうですが、水の激みが臭気の原因になっていないかと気になります。利便性向上や防災と環境の両立はたいへんなテーマです。なお、東横堀川では川に向けられた古い看板を見かけました。この川がかつて街の交通路だったことの名残りなのでしょう。

8月某日／7月の天神祭の船渡御も見ものでしたが、今度は水都大阪2009というイベントが始まりました。夏は水辺のイベントが目白押しで、部屋から川を眺めていても飽きることがありません。行きかう船のなかに実はバスが混じっています。水上バスという名の船ではなく、陸上も走れる本物の水陸両用バスです。最初に見かけたのは桜宮あたりで、ちょうど川の中からスロープを上陸してくる姿は衝撃的でした。北海道ではDMV（ドームバス）といってレール上も道路も走れる両用バスがありますが、それと似た面白味を感じます。現在、河川交通は観光用途が多いのですが、通勤？など日常用途でも可能性はあるのではないのでしょうか。ちなみに、天神橋から大阪ビジネスパーク（会社の前）までの航路があれば個人的には非常にありがたいのですが。

11月某日／天神橋あたりでカモメを見かけることが多くなったのは季節のせいでしょうか。近所に歌碑がある「天満の子守唄」の歌詞にもカモメがでてきますが、カモメを見るとこの川の先が海であることが思い出されます。先ごろ山間部に大雨が降ったあとには大量の流木や土砂が流れていましたが、川辺に暮らすと街が山と海の間にあることを実感します。



近況一地域を沸かす NPO

取締役相談役／三輪 泰司
(NPO 平安京・代表理事)

10月31日(土)、スタンプラリーのお手伝いをしました。

NPO は忙しい

NPO 平安京は、京都アスニーを出発して最初のポイント・平安宮内郭回廊跡と終点の北野天満宮、と途中のガイドを担当しました。

参加者 350 人といっても、初めはまだ散らばっていないので、案内、説明、スタンプは行列です。お年寄りから子ども連れ、それに意外に若いカップルが多かったです。(右上:記事・京都新聞)

今年、考古資料館開館 30 周年を記念して、「京都・秀吉の時代」をテーマに記念事業を展開する京都市埋蔵文化財研究所主催のスタンプラリー「聚楽第と御土居を巡る」です。考古資料館を拠点に活動している NPO たちの「西陣地域の町づくり協議会」が共催というわけです。聚楽第は秀吉が、天正 15 年(1587 年)に築城し、翌 16 年 4 月に上杉景勝・直江兼続が、ここで秀吉に会っています。僅か 10 年で跡形もなく壊され、よく判らないのです。じゅらくだい倶楽部さんは、聚楽第跡を担当し、協議会がハイテク技術を得て複製した、「豊公築所聚楽城之図」を北野天満宮に展示しました。これは江戸末

期天保 14 年(1843 年)に名倉希言という学者が描き、明治に模写され、(財)聚楽教育会が所蔵、市の歴史資料館に寄託されていたものです。

NPO は進化する

NPO 平安京では、すごろくを 2 つ作り、内郭回廊跡のポイントで展示しました。(右中:記事)

河合誠治さん作は平安京全体、2.6 × 1.8 米、羅城門を振り出しに大極殿で上がり、原田稔博さん作は平安宮で朱雀門が振り出しで、大極殿で上がり。5 ヶ月がかりの力作です。鴻臚館で止まったら 1 回お休みなんて、愉快です。

2 年前に NPO 平城宮跡サポートネットワークさんの真似をしまして、A 4 版の「平安京かるた」をつくりました。会員は多士済々。考証も加え勉強します。小学校への出前もしています。

NPO は羽ばたく

11 月 1 日(日)大將軍八神社で、新型インフルエンザ封じのツアーをしました。遂に神頼みです。大將軍八神社は平安京の西北を押さえる方除け守護です。80 体もの神像はそのうち、国宝になるのではないのでしょうか。(右下:記事)

どこで知られたのか、大入り満員で NHK も取材に見えました。

11 月 15 日(日)、府庁旧本館正庁での「連続観光講座第 2 回」も超満員でした。11 代小川治兵

衛さんに植治の庭を語って頂きました。7 代小川治兵衛は、万延元年乙訓郡神足の生まれ。私の父方は同じく神足です。ご縁ですね。

12 月 13 日、同志社大学新町校舎で、日本協働政策学会が設立され、山田啓二知事らの記念シンポがありました、地域再生・協働を研究されることはけっこうなことです。要するに、愉快地楽しく地域を「沸かす」ことでしょう。「実践的探求」で行きましょう。



アルパック建築チーム研修報告「伝統とアートの融合」

京都・大阪事務所／建築チーム

はじめに

建築チームは、久々に研修の旅にでかけました。忙中閑ありか、閑中忙ありか、そこは各自不明ながら、それぞれが調整して「閑」を生み出し全員が参加しました。

今回は、瀬戸内海に浮かぶ直島が主な目的地です。直島はご存知のように「アート」によるまちづくりを進めており、安藤忠雄氏設計のベネッセハウスや地中美術館の他、石井和紘氏設計の直島町庁舎や古い民家をアートに仕上げる「家プロジェクト」などがよく知られているところですが、私達とは、実は生野鉦山で結びついているのです。（生野鉦山は中世から続いた銀山を中心に、明治以降、フランスから招聘されたコアニエらにより鉦山の近代化が図られましたが、）生野鉦山にあった銅の製錬所を移した先が直島であり、我々は生野鉦山の文化的景観の仕事を通じて直島とも縁をもつことになったのです。いわば直島は生野鉦山の終着点といえるのです。

さて、折角海を渡るのですから、



宇野港

私達はもう少し足を伸ばし、古い倉庫を活用した高松の北浜アレイや脇町の重要伝統的建造物群保存地区などをみる旅としました。

今回の旅は古い伝統的な建物とアートが融合する接点に我々が佇むことが大きな目的でしたが、なんとといっても公衆浴場（銭湯）とアートの融合である「直島銭湯」は愉快でした。それではこれから、伝統的な建築とアートの世界へご案内します。（高坂）

宇野港

宇野港は、一日約100便ものフェリーが行き交う、24時間眠らない本州側の海の玄関口です。瀬戸内海のほぼ中央部にあり、美しい島々に囲まれ、波穏やかな天然の良港です。古くは、付近より大阪城の築城に使用した石材を搬出したと伝えられており、明治43年の旧国鉄宇野線開通と同時に宇野・高松間の連絡船航路が開かれました。大正6年、川村造船（現三井造船）が操業開始し、造船のまちとして発展してきましたが、昭和63年に瀬戸大橋開通と同時に宇高連絡船が廃止されJR宇野線の支線化により、交通結節点としての地位が低下しています。スペイン風のJR宇野駅に降り立つと、その真正面に

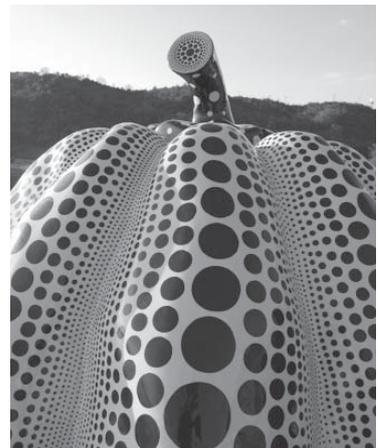


道の駅なおしま

鎮座する産業振興ビル、その周辺は緑地として整備されています。宇野港の魅力づくりと港への賑わい創出を目的に、地元に関係する女性達を中心となって平成19年度に「うの港13」という任意団体が設立され、宇野港の活性化についてはたらきかけを行っています。アルパックもその活動の支援のお手伝いに関わり、その成果の一つとして、散策道・ベンチ、案内板・解説板の魅力化として実を結んでいます。東側隣接地にはその名の通り、「駅東創庫」という芸術家の制作工房・ギャラリーがあります。来年度には、港の目の前に浮かぶ直島をはじめとした7つの島で開催される瀬戸内国際芸術祭2010も楽しみです。ところで、どこの自治体にあるかと言えば、“宇野市”は存在しなくて「玉野市」で、知名度が逆転しています。（小阪）

海の駅なおしま

フェリーで直島に着くと、「赤かぼちゃ」（草間彌生氏作）と共にまず目に入ってくる建築が「海の駅なおしま」です。妹島和世



草間彌生氏作のかぼちゃのアート



+ 西沢立衛 / SANNA 設計の直島の旅客ターミナルです。伸びやかな水平ラインと細い柱が印象的です。駐車場やカフェ、待合スペース、観光案内所やホール、WC 等が 70m × 52m の一枚の屋根の下におさまっています。(高坂)

直島町庁舎

今や直島といえば安藤忠雄氏のイメージが定着していますが、それ以前は石井和紘氏でした。石井和紘氏と聞けば少し懐かしい響きかも知れません(失礼)。直島町庁舎はおよそ 25 年前の作品ですが、古建築や建築様式、果ては工芸品まで様々な「和」を幕の内弁当のようにちりばめた結果、日本を突き抜けてしまったのがこの作品です。この建築を見ていると「どこかで見たような」という気にさせられます。この庁舎は直島の「家プロジェクト」の中にあるのですが、これもその一つかと思わせるような楽しさもっています。(高坂)

香川県庁舎

直島からフェリーに乗って約 1 時間、高松に着くと久しぶりに香川県庁に向かいました。

香川県庁は、ご存知のように故丹下健三氏の作品ですが、隣



直島町庁舎

接する新館と比べてもそのコンセプトの明快さや、ディテールが今も印象に残ります。

十数年前、県庁で打合せをした後に連れて行ってもらった讃岐うどんの店を探しましたが、見つかりませんでした。小さな製麺所だったと記憶しているのですが。(高坂)

本村地区アートプロジェクト

空き家をアーティストが作品化して常設展示するアートプロジェクト。角屋始め 7 件のアートが点在しています。しっとりした町並みの中に突如現れるポップな「はいしゃ」や中が真っ暗で??の「南寺」など五感を刺激する作品たちでした。作品以外の民家でもカフェや雑貨店も立ち並んでいます。(鮎子田)

地中美術館

かつては塩田だった場所に環境に埋没する建築が安藤忠雄氏によってデザインされています。クロード・モネ、ウォルター・デ・マリア、ジェームズ・タレルの 3 人の作品を展示するための建物。作品の持つエネルギーと建物のエネルギーがぶつかり合いながらも調和する空間。ことに印象深いのは、ジェームス・タレルの光の空間でした。光の



本村地区アートプロジェクト「はいしゃ」

壁を突き破るといふ今までに味わったことのない体験です。難を言えばスタッフの対応がもう少し違ったものであれば、もっと素直に感動できていたのではないかとも思いますが、本村地区を歩いている時に地元のおじさんたちが「『石橋』はそこやで」などごく自然に声をかけてくれたことに何故かほっとしてしまっていました。(鮎子田)

直島銭湯「I♥湯」(アイラブユ)

フェリーの発着港(宮浦港)に面した通りを少し入った所に妖艶なネオンの光を放ちそれはある。

ラブホテルかポルノ映画館かと思わせるそのファサード、アートと一体となった内部空間。その全てが芸術家、大竹伸朗(おおたけしんろう)氏の作品である。(直島の家プロジェクトの1つに、この前身となる「はいしゃ」がある。)

正面には女性のシルエットから延びる「ゆ」の文字のネオンサインが、まるで深海でアンコウが提灯で獲物を誘うかのように我々を誘っている。少しのとまどいと大きな期待。(果たしてここは我々の知る銭湯なのか、それとも〇〇なのか…。)建物の中に入ると地元のおばちゃんが番台



直島銭湯「I♥湯」

で出迎えてくれる。(少し安心。) 脱衣室では縁台に埋め込まれた映像画面が〇〇を露わにした海女の姿を映し出している。(鳥の子ども達はこれを見て大人になるのか?) 浴室の壁面には海女が海中に潜り獲物を採っている姿、浴槽の底にも何やら怪しい絵が描かれている。男湯と女湯の境壁の上には何故かゾウのモニュメント。その他にも洗い場の水洗やトイレの便器にまで、ありとあらゆるところに大竹氏の魂が染み込んでいる。果たしてこれは銭湯なのか、それと〇〇で××なブーな世界なのか。

紙面の関係でお伝えできるのはここまで。さあ、ムズムズしてきたあなた、今すぐ直島へGO。

(原田稔)

イサム・ノグチ庭園美術館

イサム・ノグチは20世紀を代表する彫刻家で、また庭や公園などの環境設計や、あかりと呼ばれる照明や家具の設計まで行った芸術家です。

この美術館は、大きく3つの要素から成り立っています。

1つめはノグチの彫刻を屋内・屋外展示しているアトリエです。有名な彫刻から制作途中の彫刻まで多数あります。石の表現も実



宿泊はバオでした

に滑らかな磨き上げたものもあれば、粗い仕上げのものなど様々です。またアトリエを円形に囲うように地元の庵治石^{あじいし}で盛り上げた石垣も力強いものです。

2つめはノグチの住まいです。旧家を移築し改造したものだそうですが、内部にはノグチのあかりや彫刻があるべき位置にあるべきものとして配されています。庭の土留めのための石垣も、見ているだけで飽きないほど表情が豊かです。

3つめは彫刻庭園です。花見や月見のための石舞台、こんもり盛り上げられた小山とそこから見る屋島、小山の裾を巡り流れるような川に見立てられた石など見どころ、というか感じどころが多くあります。

借景にしている屋島まで含めて全体がすばらしい環境となっています。予約が必要ですがその価値のあるおすすめの場所です。(三浦)

卯建のあがるまち「脇町」

徳島県の吉野川中流域、撫養街道と讃岐街道が交わる交通の要衝に位置する脇町は、阿波特産の藍の集散地として栄えた町です。中でも裕福な商家が軒を並べたのが吉野川畔の南町で、塗籠め



卯建のまちなみ脇町

の二階壁面に設けられた卯建が印象的で、間口の大きな平入りの主屋と本瓦葺きの屋根、迫力の鬼瓦、一方で通りに面した繊細な格子が、重厚かつ落ち着いた町並みを形成します。

脇町は昭和63年、全国で28番目の重伝建地区として選定されました。現在は来訪者も多いようで、地区を貫く約400mの通りには、つつい足を踏み入れてしまう、町家を利用した魅力的な和菓子屋や藍製品を取り扱う雑貨屋、カフェなどが営まれています。

また地区の東側には映画「虹をつかむ男」(山田洋次監督)の舞台となった脇町劇場/オデオン座があります。オデオン座は昭和9年に芝居小屋として建てられたもので、閉館取壊しという危機を乗り越えて、現在は市指定文化財として修復一般公開、コンサート等の催しも現役で行われています。(和田)

うまいもん

旅の楽しみは、そこでしか味わえない一品を食することに尽きると思います。この研修旅行で出会ったうまいもんたちをご紹介します。

JR岡山駅から宇野港へ向かう途中の道の駅「みやま公園」に「たまげたバーガー」なるものがあります。「たま」は玉野市のたま「げた」は舌平目のことをこの地方では「げた」というそうです。

この舌平目をつくねにしてあ



きんきょう

り、あっさりしながら特製タルタルソースが濃厚さも引き出しています。バンズは紫芋を練り込んであり、ほんのり紫色がおしゃれ。

夜は直島にて「ばっしゃ鍋」、味噌味の海鮮鍋。ばっしゃとは漁船のことだそうです。網の中で魚が「ばっしゃばっしゃ」と跳ねる音から由来するとも聞きました。カワハギやイカ、ホタテなどの味がしみ込んで、最後の雑炊まできれいに平らげたのはもちろんのことです。

高松に渡ればもちろん讃岐うどんです。讃岐うどんはうどんの刺身と言われ、打ちたて・茹でたてが命です。うどんに菌ごたえというのも変な感じですが、まさに菌ごたえと押し戻してくる弾力感と小麦の香りが絶品でした。今回は高松市街の「さか枝」と「丸山製麺所」に行きました。時間切れで3軒目にトライできなかったのが心残りです。(鮎子田)



たまげたバーガー



ばっしゃ鍋

アルパック・ワイガヤミーティングやっています

大阪事務所／中塚 一

まちづくりの現場では、近年、地域（社会）での人と人との関係が希薄になり「地域力」が低下してきている現状を打破し、地域での交流とつながりを再構築していくために、「ラウンドテーブル」や「まちかど井戸端会議」等と呼ばれる情報交換の場が多く開催されています。

人間関係が希薄になっているのは企業（会社）でも同じであり、ピーター・ドラッカーの「組織におけるコミュニケーション（マネジメント・コミュニケーション）」を持ち出すまでもなく、様々な組織において創造的コミュニケーションの重要性が高まってきています。

アルパック大阪事務所では、昨年の6月より毎月第3金曜日の夜に事務所の会議室で、各所員が1ヶ月の様々な情報を持ち寄ってワイワイガヤガヤと情報交換する「ワイガヤミーティング」を開催しています。もちろん肩書きを外し、寄れる人が寄れる時に、自由にまちづくりについて話し合ったり、知恵を出し合ったり、



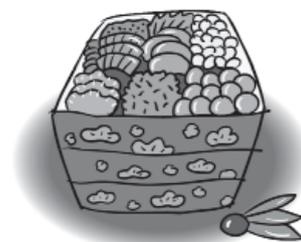
讃岐うどん

情報を交換する場づくり（単なる事務所内での飲み会との噂もありますが）を目的としています。

コンサルタントという職業柄、様々な地域に出向き、地域特産のお酒や食材、土産等に出会う機会も多く、また様々な「まちづくり人」のお話を聞く機会もあるので、毎回、それらの酒の肴をネタに盛り上がっております。

最初は、地域産品会的要素が強かったのですが、最近は自分が関わったイベントや計画づくりのプロセス秘話、事例視察やヒアリング等によるまちづくりの最新情報交換の場となってきました。

「ワイガヤミーティング」から何が生まれてくるかは今の所、未知数です。但し「コミュニケーションを図るには、経験の共有が欠かせない」「組織におけるコミュニケーションは、手段ではなく、行動や発想の様式である」というドラッカーの言葉は、参加者メンバーには徐々に骨身に染みてきています。



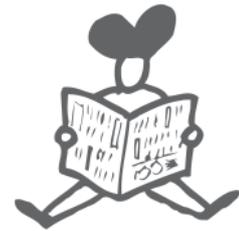
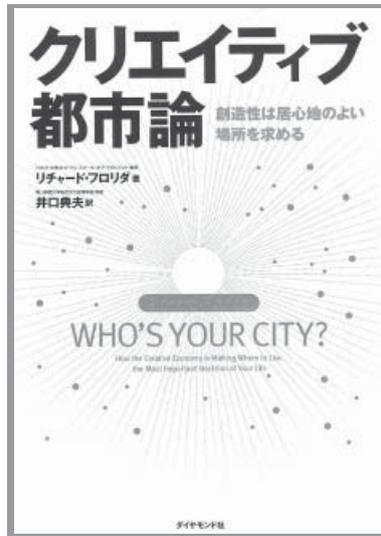
<お詫びと訂正>

前号 158 号と 156 号の「尾張名古屋城下町の風景を訪ねて」の文中の「尾張名所図絵」の文字が間違っていました。正しくは「尾張名所図会」です。お詫びの上訂正します。

MEDIA WATCH

「クリエイティブ都市論」
～創造性は居心地のよい
場所を求める～

リチャード・フロリダ著
井口典夫訳
ダイヤモンド社



紹介者／代表取締役社長 杉原 五郎

＜メガリージョン＞という言葉を ご存知ですか

リチャード・フロリダ（トロント大学教授。創造性を持った人材、すなわちクリエイティブ・クラスが経済の主要な担い手になることを主張）は、「世界はフラットではない、鋭い凹凸があってスパイキーである」という。グローバル化する地球を宇宙の衛星や航空機から眺めると、光量が集中している箇所があり、これこそ、人口が集積し、経済活動が活発に展開され、才能が集まり、イノベーションが盛んなメガリージョンと定義する。

世界には、40ほどのメガリージョン（日本には4つ）があり、そのうちのひとつ広域東京圏は世界で第1位、大阪・名古屋圏は第5位にランクされている。ちなみに、日本の第二のメガリージョンである大阪・名古屋圏には、3600万人が居住し、1.4兆ドルのLRP（夜間光量に基づく地域生産）を産出している。

幸せになれる場所は、どこですか

フロリダは、〈メガリージョンの世紀〉について経済地理学的な視点から独自の分析を披瀝する一方で、〈場所の経済学〉〈場所の心理学〉について語っている。人々は人生の選択において、何を（どのような仕事を）して、誰と（どのような伴侶と）一緒に暮らすか、とともに、どこに住むかという（居住地の選択）を重視している。自分が幸せになれる場所はどこか、これがフロリダの2つ目の問いである。

才能が集まり、イノベーションが活発で、創造性豊かな場所は、芸術家（ボヘミアン）や同

性愛者（ゲイ）が住んでいる地域と密接な係わりがあるという興味深い事実を発見する。創造性は居心地のよい場所を求める、というわけである。佐々木雅幸氏（大阪市立大学教授）やチャールズ・ランドリー（コンサルタント、英国）

の創造都市論と相通ずるものがある。

いま、日本では、大都市圏を中心に、人口や大学などの都心回帰が進んでいるが、人々は幸せになれる場所を求めて移動しているのだろうか。フロリダの指摘を踏まえて、〈日本における幸せな場所探し〉について考えてみたい。

著作活動のバックヤード（裏庭）

フロリダの本は、都市計画やまちづくりの仕事をしている私達に興味深い事実を突きつけるが、最後の謝辞を読んでいて、この本が生まれるバックヤード（裏庭）にも関心を持った。本書は、長年にわたる地道な取材と調査活動、関連する数多くの文献サーベイ、共同研究者との忌憚のない議論、スタッフとの幅広い協働、家族の精神的な支えなど、ねばり強い努力の積み重ねから産み出されたことを知り、感動し納得した。

最近、山崎豊子さんの本「作家の使命 私の戦後」（新潮社）を読んだ。この本の中で山崎さんは、「不毛地帯」「二つの祖国」「大地の子」「沈まぬ太陽」「運命の人」の舞台裏を語っているが、5年から8年にも及ぶ長期のねばり強い取材活動があって、人々を感動させるベストセラーが生まれることがよくわかった。シンクタンク、コンサルタントも、かくあらねばと痛感した。



戸田漕艇場の風景

大阪事務所／坂井 信行

戸田漕艇場は埼玉県戸田市の南部、荒川のほとりにあります。東西方向が約 2,500m、南北方向が約 300m の細長い静水域で、東京オリンピックのボート競技の会場となった場所です。歴史をひもとくと、何と 1940 年の幻の東京オリンピックのためにつくられたという由緒正しいボートコースです。オリンピックの後は県営戸田公園として整備されていますが、もちろん今でも全国にその名を馳せるボート競技のメッカです。

水辺には大学や実業団の多くのクラブの艇庫が建ち並んでいます。実は漕艇場の西側には戸田競艇場が隣接しており、こちらも有名です。ある市民の方はおっしゃいました。「どちらにお住まいですか？」と訪ねられて「戸田です」と答えた時に「ああ、競艇場のあるところですね」と言われるより「ああ、ボートコースのあるところですね」と言われる方がうれしい、と。いずれにしても戸田はボートのまちなわけです。

観客席のあるボートコース南側は芝生の斜面と艇庫、西側には桜並木もあり、気持ちのよい水辺の散歩道としても非常に人気のある場所です。

少し専門的な話になりますが、戸田市景観計画では県営戸田公園を景観重要公共施設に指定しています。重要な景観資源として行政としても位置づけの高い場所ということです。先頃、戸田市では「つたえたい戸田の風景」の写真募集が行われ、私たちもお手伝いをさせていただきました。入賞作は現時点ではまだ発表されていないのですが、応募された写真には漕艇場を写したものが一番多かったように思いました。

今回、この記事を書くにあたって改めて漕艇場を訪れてみました。JR 戸田公園駅からゆっくり歩くと 15 分ぐらいかかります。途中、艇庫の中で競技用のボートをメンテナンスしている風景に出会いました。この建物はボートコースの水辺に建っており、水辺側と反対の道路側の両方からアクセスできるようになっています。道路を歩いていて突然、ボートが見えた時には新鮮な感激がありました。ボートコースの水面を中心とする水辺の風景の印象があまりに強かったためでしょうか。陸側から見た漕艇場は私にとってとっておきの風景になりました。



艇庫が建ち並ぶ水辺の風景



コース沿いの道



ボートをメンテナンスする風景
(奥に見えるのがボートコース)

アルパック(株)地域計画建築研究所

<http://www.arpak.co.jp> E-mail info@arpak.co.jp

本 社

京都事務所 〒 600-8007 京都市下京区四条通り高倉西入立売西町 82
大阪事務所 〒 540-0001 大阪市中央区城見 1-4-70 住友生命 OBP プラザビル 15F
名古屋事務所 〒 460-0003 名古屋市中区錦 1-19-24 名古屋第一ビル 6F
東京事務所 〒 160-0001 東京都新宿区片町 1-20 萩原ビル 3F
九州事務所 (株)よかネット 〒 810-0802 福岡市博多区中洲中島町 3-8 福岡パールビル 8F

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478
TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760
TEL(03)3226-9133 FAX(03)3226-9560
TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128